

## 牧畜を人文学する

シンジルト・地田徹朗編，名古屋大学出版会，2021

岩本佳子

西南アジア地域の歴史を研究する上で「遊牧民」の姿を見にしないことは困難であろう。歴史上空前の大帝国をうち立てたモンゴルの例を出すまでもなく、中央ユーラシア、中東、南アジアの諸地域において、遊牧民の軍事活動や征服活動、経済活動は歴史を大きく動かしてきた。しかしながら「遊牧」「移牧」「移動牧畜」そしてそもそも「牧畜」とは何かといった基本的かつ根本的な問題は、歴史研究においておろそかにされがちである。ところが、改めてそれらの問題に向き合ってみると様々な課題が残されていることに気付かされる<sup>1)</sup>。

文献史料に重きを置く歴史学とは異なり、人類学の分野においては「牧畜」や「遊牧」そのものを鋭く問ういくつもの研究がなされてきた。本書『牧畜を人文学する』は、科学研究費補助金基盤研究(B)プロジェクト「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」(17H04538)の研究成果の一部である。本書は地球上のいくつかの牧畜社会あるいは元牧畜社会を取り上げ、その内部における集団関係の在り方、牧畜という生業要素がいかに集団関係の形成に関与してきたかを分析する。強大な国家の支配に対する牧畜民の対応や抵抗を描き出すことを主軸に、牧畜民研究の教科書を目指して編まれた野心的な論考集である。

本書は全3部の構成で、各部には4章の論考が含まれており、計12人の執筆者による12本の論考が収録されている。東アフリカ、アナトリア、東ヨーロッパ草原、カザフ平原、西シベリア低地、モンゴル高原、チベット高原、ヒマラヤ山脈、南ロシア草原、東アフリカと牧畜社会が形成されているもしくはされていた広範な地域を扱う。研究分野も歴史学や文化人類学、研究手法も文献学、参与観察、フィールドワークと幅広く、学際・分野横断的な内容である<sup>2)</sup>。

1) 本書の5章では、ソ連の歴史学者・人類学者であるハザノフによる牧畜の定義、分類を援用して、一年中家畜を追って移動を続ける形態の移動牧畜が「純遊牧」、山岳地域での放牧と農耕において夏と冬用に標高の異なる場所に村を持つ形態は「トランスヒューマンス(季節的移住)」と説明されている。12章での遊牧の定義は、大陸性気候の乾燥した厳しい自然環境の中で草や水を求めて、一般に中央ユーラシアでは家畜の放牧先を決めて季節ごとに一年かけて周遊する形式で行われる移動牧畜であり、住居は固定家屋ではなく天幕になるとされている [Khazanov 1994: xxxii-xli, 23, 103; シンジルト編 2022: 5, 229]。

2) 本書で扱われなかった南アジアおよびアンデス地域における牧畜については、本書に続けて2022年に発刊された『写真で見る牧畜文化』にて取り扱われた [シンジルト編 2022]。

オスマン朝（1300年頃-1922年）の支配下における、バルカン半島、アナトリア、歴史的シリアおよびクルディスタンに居住したユルック、トルクメン、クルド、アラブといった遊牧民や部族民を文献史料から研究している評者が、このような幅広い分野にまたがる本書を評することは適当ではないかもしれない。しかしながら、本書が、歴史研究者や西南アジアの地域研究者にとっても非常に重要な価値を持つことに鑑みて、評者をつとめた次第である。

本書の問いや狙い、リサーチクエスションは序章で以下のように示されている。

第一部では、近現代の牧畜民社会の「変遷」をテーマに「特に近代以降において、限定された土地に囚われない牧畜民たちは、いかなる統治原理のもとで、ヨーロッパの植民地当局や異なる政治体制の定住国家によって、定住化し、周縁化されてきたのか。自らの生活を余儀なく改変させられる中で、牧畜民たちはどのような戦術をもって国家と折衝してきたのか」(5)<sup>3)</sup>を扱う。歴史学に関する論考はこの第一部に主におさめられている。

第二部では「グローバル化が進む現代における牧畜民や元牧畜民たちは、自らを包摂する国民国家あるいは国際機構との交渉の中で、どのように自分たちの伝統や価値観を位置づけているのか。牧畜民であるというアイデンティティの発現、高揚によって、いかなる社会的経済的ナリヤリティがさらに醸成されようとしているのか」(5-6)を考察する。

続く第三部では「多様に変化する今日において、牧畜民や元牧畜民たちは、どのように他者を想像し自らの集団を形成しているのか。彼らは敵と味方の境界をどのように設定し、さらにその境界をいかにして乗り越えてゆき、共生の状況を生み出しているのか」(6)を議論する。

第1章の秋山徹著「ユーラシア牧畜民がリーダーに求めたものとは？：血と力」は、属人的でおおらかで柔軟な人間の集合体である牧畜社会において、集団をまとめる支配の正統性を、ロシア帝国とクルグズの事例より考察する。モンゴル期以降の中央ユーラシアの牧畜民のもとでは、チンギス統原理という血統と、従える民を食べさせる勇敢な軍事指導者という実力が支配の正統性を担保した。ただし「信仰の保護者」という正統性を支える別種の原理や、血統や出自の境界を越えて有能な者を登用するという一定の柔軟さも存在した。近代の中央ユーラシア地域が清・ロシア両帝国の支配に飲み込まれていく中で、牧畜社会の属人的集団は対応を迫られていく。近代国家の一元的な支配を目指す志向と曖昧な境界の中で生きる牧畜民の間の齟齬の中で、牧畜民は「血と力」による属人的集団という性格を保ちつつも、民族知識人という近代的な教育を受けて言論活動を軸に教育と啓蒙によって牧畜社会を近代化することを目指す新たなリーダーを生み出していく。

楠和樹による第2章「アフリカ牧畜民は帝国をどう経験したのか？：移動と境界線」は、アフリカ牧畜民の帝国経験を境界線から見つめなおす。アフリカの角であるソマリア地域では、家畜とともに移動する牧畜民の自由な移動がなされてきた。しかし、ヨーロッパ諸帝国

のアフリカ進出と植民地化、英仏伊エチオピアによる地域分割により、同地には境界線が引かれ、家畜を率いる牧畜民の自由な移動は強く統制され妨げられることになった。境界線によって空間を規定し、集団を領域的に分断するという近代国家の論理とそれによる領域的な国家支配の実現は、牧畜に厳しい制限を課すことになり現代にも爪痕を残している。しかし、その中で牧畜民は移動牧畜を続ける方策を見出していく。境界域では、国家の監視、統制が困難であったことを活用し、行政や司法、警察の管轄範囲や権力の境界を逆に利用しその境界を越えて移動することで国家の支配や統制から逃れる戦略を編み出していく。境界線を新たな資源として利活用するという移動牧畜民の主体的な戦略が本章では強調される。境界の登場が越境という新たな戦略を可能にするという楠の指摘は、他の地域や時代、集団へも広がりうる研究の可能性を提示する。

井上岳彦の第3章「ロシアの牧畜民はなぜ魚も好むのか？：定住化と生存戦略」は、ロシア連邦カルムイク共和国の牧畜民集団の生業とアイデンティティを取り扱う。モンゴル系オイラト牧畜民を祖とするカルムイクは「移動性の高さを利用した牧畜」(52)に従事し「牧畜に必要な自由な遊動」を行う「遊牧民」(55)であった。ロシア帝国、ソ連、ロシア連邦と支配者が変わる中で、定住民と牧畜民の間で土地所有権の認識が大きく異なったために、カルムイクの生業である移動牧畜には厳しい制限が課されてしまう。結果、カルムイクの生業は漁撈、そして食肉・役畜供給のための工業的畜産へと転換を余儀なくされてきた。現在のカルムイクにおいては牧畜が誇るべき民族文化とされ称揚されているが、そのことは、20世紀においてカルムイクを支えた生業である漁撈文化の軽視を引き起こしている。社会環境と自然環境の変動が牧畜の形態や文化の歴史の変容につながっていることが、本章では詳細に解説される。

編者の一人である地田徹朗の第4章「ソ連はカザフに何をもたらしたのか？：遊牧民と近代化」は、ロシア帝国と社会主義のソ連時代を連続したものとして捉え、中央ユーラシアにおけるカザフの近代化が苛烈な全面的集団化による遊牧の消滅であったことを解説する。本章は「遊牧」を冬営地・夏営地間の垂直および水平移動をともなう移動牧畜の一形態と定義する(69)。ロシア帝国による中央ユーラシア征服はカザフ地域へのロシア系定住農耕民の進出を引き起こし、カザフ遊牧民とロシア系定住民間の衝突を頻発させた。近代化とは定住化であるという図式のもとで、カザフ遊牧民の強制定住は進められていく。特に、1920から30年代にかけてのソ連において合理的で正しいこととされた「近代化」とはカザフの強制農業集団化であり、従来の社会秩序、遊牧社会の苛烈な解体・破壊を意味した。1950年代には移動牧畜の見直しが進み、部分的には牧畜が復活する。しかし、それは近代産業に組み込まれた牧畜コルホーズという形であり、工場で生産された天幕に居住し、内燃機関を輸送や移動に活用するものであった。現在のカザフにおいては「今なお多くが牧畜を生業」とするものの「一年中、家畜や天幕と共に移動を繰り返していた、かつての遊牧民はもはやカザフには存在しない」と地田は述べる(66)。強制全面的集団化・定住化以後に成立した長

3) 以下、本文中のページ数表記は断りのない限り本書のページ数を示す。

距離移動をとまわらないカザフの牧畜は、かつてのカザフの遊牧とは異なるものだという。本章の議論は十分に説得力を持つものの、そもそも牧畜と移動牧畜、そして遊牧は何がどう異なるのか、それらは断絶しているのか、それともグラデーションのように連続しつつも異なるものなのか、読者に考えさせる内容である。

宮本万里による第5章「ヒマラヤ牧畜民の暮らしに大切なものは何? : 交換と分業」は、ヒマラヤ、ブータン中西部の高地に住む牧畜民ラガップが農耕民との間に取り結ぶ交換と分業に基づく「ネップ」という関係の変化を、牧畜民の主体性に焦点をあてて描き出す。ブータン中西部においては、高地牧畜民のラガップと地域農民が、互いに親しくモノとサービスを交換し互いの共同体の祭祀を滞りなく行うために、ネップという交換と分業の関係を結んできた。ネップ関係のもとでは、両者は単なる交易パートナーにとどまらず施主と屠畜者という側面も持ち、牧畜民は農耕民の客でもあり同時に物乞いでもある。こうして牧畜民と農耕民は、明確な区分や境界が存在するいわば非対称的な他者との共存を実現させていた。しかし、1950年代より始まったブータン王国の近代化、国民統合、初等教育の普及は牧童不足と移牧の制限を引き起こし、ヒマラヤ牧畜民の定住化を促していく。冬の定住村の形成と共同体の分節化の帰結として、ネップは生産物の直接的で共時的な交換関係のみの一元的な交易関係へと急速に収縮していく。今では冬虫夏草採集がラガップの主たる現金収入となり、牧畜文化や伝統は「遊牧民・高地牧畜民祭」という伝統文化、観光資源になっている。その中でもラガップは「誇り高き高地民」としての自己認識を持ち、共同体の独自規範を堅持すべく自律的な内婚集団を希求し、農耕社会との差異を明確に保ち続けている。主流社会による均質化の力に抗しつつ生きようとする高地牧畜民の力強い主体性が、本章の記述からは伝わってくる。

第6章は田川玄による「エチオピアの遊牧民はなぜ畑を耕すのか? : 生業と国家」である。かつて農耕や狩猟採集といった牧畜以外の生業を見下していた牧畜民ボラナだが、州境、国境といった境界の登場でそれまでのように自由に移動して牧畜を行うことが極めて困難になった。だが、ボラナは自ら生業を牧畜から農耕へ転換し生存を図った。現在のボラナはすすんで定住し、政府や国際社会の支援をたくみに利用して現在も主体的に生計活動を営んでいる。2章と強く連関する本章においても牧畜民の主体性に主眼が置かれている。

田村うらはは第7章「トルコの遊牧民は時代遅れか? : 帰属意識と文化」でトルコの「遊牧民」ユルク<sup>4)</sup>を帰属意識と文化の面から取り扱う。トルコでは、1960年の森林法に見られるように、遊牧は「遅れた」生活形態であり「粗暴な」放牧は自然破壊の元凶であるとされ、遊牧民は蔑視や差別にさらされてきた。田村は夏营地と冬营地の固定された二箇所のみに住居し放牧を行なう牧畜を「移牧」とし、現在も家畜を飼養し移動するユルクの

大半は実際には移牧民であると述べる(130)。そして、大半のユルクの生業は遊牧や移牧ではもはやなくなり、完全に定住生活を送るようになり牧畜に従事する者は少数となってしまった。しかし、2000年代以降に盛んになった「ユルク祭典」やユルク=トルクメン団体<sup>5)</sup>の活動により、遊牧や遊牧民はオスマン朝、トルコ共和国へと連なる我々トルコ人・民族・国家の誇るべき基層文化という肯定的なイメージに変わり、ユルクに対するまなごしは肯定的なものになっていく。本章では、「ユルクの伝統」がユルクのみならず、これまではユルクに含まれてこなかった人びとや集団であっても「テュルク」や「遊牧民」という共通点を持つことを理由に同じユルクとみなすなど、境界が乗り越えられていく様相があざやかに示される。しかし、そのことは、あたかもオスマン朝やトルコ共和国が政府に親和的な集団と反抗的な集団の間に線を引いてきた<sup>6)</sup>ように、包摂される範囲のさらに外に境界線をひくことにもつながりかねないのではないか。本章の議論はさらなる思索へと読者を誘う。

第8章「土地の私有化はモンゴルになぜなじまない? : 移動と開発」という上村明の論考は、モンゴルにおける経済開発と自由な移動をめぐる問題を、土地の私有化をめぐる議論から浮き彫りにする。著者はモンゴル高原における土地の私有化は明確な境界の形成をとまなうものであり、それは牧畜民の自由な移動と本質的にそぐわないと述べる。社会主義時代のモンゴルにおいて牧地は非私有地とされていた。上村は、モンゴルにおける移動牧畜を、高度差を利用した季節移動でありヨーロッパ、アルプス地方で行われてきた決まった二つの地点を移動する「移牧」と類似したものであるとしつつも、モンゴルでのそれは當地場所がひろい選択肢のなかから比較的自由に選択され「オトル」と呼ばれる機会主義的移動をとまなうとする(148, 151-152)。そのようなモンゴルの伝統的な移動牧畜のあり方は、1990年代の資本主義経済導入、2000年代の気候変動の影響、鉱山業、観光開発の進展といった激変に晒されてきた。「コモンズの悲劇」や「ショックドクトリン」を根拠に国際機関やモンゴル国政府は牧地の私有化を進めようとし、幾度も伝統的な牧畜に介入を試みてきた。そこには、牧地の荒廃を防止し土地開発を容易にするためには明確な境界を形成せねばならないという、科学や経済性を旗印としたある種のパターンリスティックな意図がある。そのような

5) ユルク協会では同じテュルク系の遊牧民である「ユルク」と「トルクメン」の分別は困難であるとし、団体名などでは両者を連名で扱うことが一般的であるという(133)。

6) 本章で紹介されるエルトゥールル廟での祭典に参加するユルクの中には、ウルファ近郊のクルド人集団も「ユルクのカラケチリ族」として参加している。これはオスマン朝のアブデュルハミト2世(r. 1876-1909)の治世下に国祖エルトゥールルの墓廟が整備・顕彰され、オスマン朝政府に親和的な集団が、「カラケチリ族」というエルトゥールルの同胞とされた西アナトリアのトルコ系部族とされて廟で特別な儀礼に与る等の特権を認められた歴史的背景と関係している[Güray 2021]。その一方で、ハミト期はオスマン朝政府が「好ましくない」と見なした非イスラーム・スンナ派集団へはイスラーム・スンナ派への改宗や政府への恭順の圧力が高まり、「反抗的」と見なされた集団に苛烈な弾圧がしばしば行われるなど、包摂と排除の論理が強く働いた時代でもあった[Alkan 2022]。

4) 田村は「ユルク yürük」, 「トルクメン Türkmen」という表記を採用している。ユルクやトルクメンについては別の表記が行われる場合もあるが、本稿においては田村の表記に従った。

動きに対して、モンゴルの牧地民は明確な境界の形成は牧地の効率的な利用を制限してしまいかえって牧地の荒廃につながると主張して抵抗してきた。乏しい降水量に大きな環境変動といったモンゴルの非均衡的エコシステムにおいては、モンゴル現地の環境、伝統にのっとり境界を曖昧にした牧畜の方式こそが、危機に際して選択肢を増やし、環境や状況の変動に対応できる高いレジリエンスを有するという本章の指摘は重要であろう。

大石侑香の第9章「シベリアでトナカイがはぐれたらどうする? : 自助と互助」は、西シベリアのトナカイ牧畜と狩猟採集、漁撈を組み合わせた生業複合民を取り上げ、互助と採め事への対応を軸に住民達の共生関係を描き出す。ハンティヤ森林ネネツといった民族から成る西シベリアのトナカイ牧畜民は、境界線を引いた排他的な占有ではなく、互いを排除せず土地を共有している。彼らは平等・対等的な隣人関係の中で採め事をあらかじめ回避するようふるまうという。本章ではトナカイ牧畜民の適度な自立と共助によるゆるやかな共生の姿が明らかにされる。

編者であり研究プロジェクトの主幹であるシンジルトの第10章「チベットの牧畜民にとって親族とは何か? : 集団と越境」は、チベット高原の牧畜民を取り上げる。現代のチベット高原では牧畜民の定住化が進められ、牧地が境界線で分断されて移動が困難になり、各集団、世帯がますます孤立しつつある。その中でにわかにならぬ元牧畜民の間で「ニエディ」という「先祖を同じくする」すなわち始祖意識という形で社会的領域を共有する人びとの集まりが盛んになっている。ニエディは実際の集まりのみならず、SNS上のグループチャットなどのヴァーチャルな集まりへと今や拡大しつつある。「元モンゴル系牧畜民」であれば、民族籍がモンゴル族ではなくチベット族であっても母語がチベット語になっようとも「モンゴルの偉大な始祖」を共有するものとしてニエディには参加できるという。ニエディの場に立ち現れる、異なる集団の存在を認めつつその境界を乗り越えていくしなやかな集団性を「牧畜民的」と著者は結論づけている。

波佐間逸博による第11章「ナイル牧畜民はなぜ敵を助けるのか? : 動物といのち」は、他の章とは異なるフィールドノートをそのまま文章に起こしたような独特な文体が目立つ。サバンナで暮らすナイル牧畜民を生体人類学の観点より研究する著者は、フィールドの様々な経験から、ナイル牧畜民にとって家畜と人間、野生動物と人間、敵対する部族と自部族といった他者と自己の境界が容易に乗り越え可能であることを描き出す。本章は、牧畜民の越境性という本書を貫くテーマが強くあらわれる章の一つであろう。

最後に配された坂井弘紀による第12章「ユーラシア牧畜民の英雄叙事詩とは何か? : 敵と味方」は、中央ユーラシアの牧畜民の中からテュルク系遊牧民の英雄叙事詩を題材に、叙事詩の語りの中にあられる敵と味方の表象や「民族」の経験を取り扱う。中央ユーラシアのテュルク系遊牧民の間で語り継がれてきた英雄叙事詩や口承文学という「民族文化」には、遊牧民が長い歴史のなかで、広大な領域においてさまざまな人々と「共生」できた知恵があらわれているという。歴史や経験を叙事詩に昇華していく際には、1章で登場した民族知識

人が、歴史を文化遺産や共通のアイデンティティにするために重要な役割を果たしていた。そこには、過酷な状況を生き抜くための他者とのさまざまな駆け引きや権謀術数、敵と味方の境界の越境を含む人間関係の構築と維持、倫理、道徳、指導者、英雄の徳目が立ち現れてくる。

本書で紹介される豊富な事例はいずれも極めて興味深いものであり、「騎馬遊牧民」や「伝統文化」という牧畜や遊牧をめぐる強固なイメージが解体していく感覚を評者は味わった。また、本書を読み進めていく中で「遊牧民研究者」を自称しておきながら己の浅慮や学究の不足を痛感させられた。本書の価値は読者の多くが認めるであろう。

しかしながら、そのことは本書に瑕疵が全くないことを意味するわけではない。そもそも、本書では「牧畜」という言葉が表題では用いられつつも、各章では「移動牧畜 mobile pastoralism」「移牧 transhumance」「遊牧 nomadism」といった語が、執筆者の裁量に任せて用いられている。一部の執筆者はそれらの語の定義や意味づけを示してはいるものの、それらは本書全体を貫くものとは言い難からう。そもそも、本書において「遊牧」と「移牧」や「移動牧畜」はどの程度異なるものとして扱われているのであろうか。例えば遊牧民研究の第一人者であるハザノフが述べるように、アルプス山脈やイベリア半島でかつて広範に行われていた、夏は高原の牧草地で放牧し冬は低地の家畜小屋で家畜を飼養するという垂直方向の移動をとともう定点的な移動牧畜を移牧とし、夏は夏营地・冬は冬营地で放牧しつつも水平方向の自由な移動が主となる移動牧畜を遊牧とする区分法<sup>7)</sup>を、全ての執筆者が採用しているとは評者にはとても思えなかった。ディシプリンの異なる専門家の間で統一的な見解や定義を定めることは決して容易ではないという諸事情や、あえて牧畜の多様性を示すために統一的な見解や定義を採用や提示しない、もしくはそういった定義付けやカテゴリー化の有効性やその弊害に十分に配慮を払いたいといった編者の意図やねらいは十分に推察できるもの<sup>8)</sup>、やはり読者のためには、何らかの形で本書の執筆方針に大きく関わる本書全体を貫く定義や方針をまとめた形で提示すべきではなかったらうか。

また、本書の豊富な事例の興味深さは、逆に読者が本書から一貫したものを捉えることを難しくしているようにも評者には感じられた。これらはいわば複数の著者が執筆する編著の宿命であり、読者が本書を最初のページから読み進めなくても各々の関心に依じてどの章からでも読み進めることができる構成を採用した編者の狙いであったかもしれない。しかし、重要な用語解説が初出の箇所になく、後出の関連する章や箇所を参照するような指示が文中や註に必ずしもあるわけではないなど、その構成に多少の問題があることは否定しきれないだろう。また、各章の内容や議論には章をまたいでつながり合うものがいくつもあるが、統括

7) Khazanov 1994

8) 本書の議論を経て、翌年に同研究プロジェクトの成果として発刊された『写真で見る牧畜文化』では、本書の編者の一人であるシンジルトによって「遊牧」「牧畜」「移牧」の分類や定義をめぐる議論や研究史が詳細に紹介されている [シンジルト編 2022: 5-10, 150-151]。

の終章がないために、序章での問いに対する解答はまとまった形では明示されない。読者各人が解答を考え探し求めるというオープンクエスチョン的な狙いかもしれないが、やはり本書の中で一定の解答が著者や編者から明示されないことは惜しむべきであろう。

本書をつらぬく主題の一つは、外来の欧州植民地帝国、近代国家による支配への牧畜民の対応とそこに見られる牧畜民の主体性であろう。ロシア帝国と中央アジア、ソマリアと英国・イタリア・エチオピア帝国、その他各地の中央政府や国民国家に対峙することとなった牧畜民は、境界の縮小・拡大、土地利用や生業のあり方、味方・敵といったあらゆる境界の変性を逆手に取ることで、時に牧畜を自ら捨ててまで高い対応力を示してきた。ところで、その高いレジリエンスすなわち適応力は、彼らが牧畜民であることに起因するのだろうか。それとも、交易に従事する商人などの他の移動する民や農民や都市民といった定住民にすらもあてはまるものであるのだろうか。そうであれば、牧畜民と非牧畜民という区分も越境されていくものになるのだろうか<sup>9)</sup>。そうすると、両者を区分して牧畜をことさらに取り上げる意味はどこに見出されるべきであるのか。また、越境の対象となる境界が新たな敵や分断や断絶を生むことやその可能性をどのように評価すべきであろうか。こういった疑問は読者に開かれたままとなっており、その答えは各人が本書を読み解いて考え見つけていくことが求められているのであろう。

何より、評者が本書を一読して抱いた疑問は、表題である「牧畜を人文学する」とはいかなることなのかというものであった。本書における人文学は、具体的には、歴史学、地域研究、文化人類学、文学研究を指し(5)「自然現象を対象とする科学に対して、人間の歴史と文化の解明に集中する」ものである(206)と述べられている。そして、本書の英題は「exploring pastoralism in the humanities」である。それでは「explore pastoralism」が、牧畜を人文学「する」ことになるのか。そうではないのか。そもそも、それはどういうことになるのだろうか。

なにより、本書の枠組みが、牧畜を「人文学」の観点から研究するというものである以上、構造的に牧畜を考えるにあたって取りこぼしが生じてしまうことは、これは求めても仕方がないことではあるかもしれないが、否めないであろう。草原考古研究会の華々しい研究成果や活躍に見られるように、遊牧民研究において重要な成果を占める考古学や<sup>10)</sup>、編者の一人である地田も参加した総合地球科学研究所「イリプロジェクト」の一連の研究成果<sup>11)</sup>のように、アラル海の縮小問題などでめざましい成果をあげている環境史や古気候学など、人文学以外の知見も導入した研究への言及や目配りがさらに本書に加われば、また違った視界や知見が開けるのではなかろうか。

以上、屋上屋を架す愚考を連ねてきたが、このことが本書の価値を損なうものではなくな

9) 秋山徹氏とのやり取りよりこの着想を得た。この場を借りて謝意を表したい。

10) 草原考古研究会編 2019

11) 窪田順平監修 2012

い。本書の議論に触発されて様々な者が各々「牧畜」について考えをめぐらしていくことこそが、まさに「牧畜を人文学する」そして「牧畜を研究する」ことになるのかもしれない。

#### 参考文献一覧

- Alkan, N. (2022) *Non-Sunni Muslims in the Late Ottoman Empire: State and Missionary Perceptions of the Alawis*. London: I. B. Tauris.
- Güray, Ş. (2021) "Urfa Bölgesinde Yaşayan Karakeçili Aşireti." *Türk Dünyası Araştırmaları*, 128 (252), 153-170.
- Khazanov, A. M. (1994) *Nomads and Outside World*. J. Crookenden (tr.) 2nd ed., Wisconsin: University of Wisconsin Press.
- 窪田順平 (監修) (2012) 『中央ユーラシア環境史』全4巻, 臨川書店.
- シンジルト (編) (2022) 『写真で見る牧畜世界: 21世紀の社会で共生を探る』風響社.
- 草原考古研究会 (編) (2019) 『ユーラシアの大草原を掘る: 草原考古学への道標』勉誠出版.

(京都大学文学部)